

# ヒバクシャ国際署名 奈良県民の会 推進ニュース

2020年3月15日 no.2

ヒバクシャ国際署名  
推進奈良県民の会

〒630-8213

奈良市登大路町5-5

奈良県教育会館内

☎0742-26-7135 fax0742-27-3314



## 県民の会結成後

## ヒバクシャ署名推進の行動始まる

荒井奈良県知事と  
懇談・要請

懇談・要請

3月10日、ヒバクシャ国際署名推進県民の会は、荒井正吾奈良県知事と懇談し要請を行いました。要請は①ヒバクシャ国際署名奈良県民の会への賛同人になっていた

設に署名コーナーを設置してほしいこと。③被爆者の要望で「被爆者手帳へカバー」をつけてほしい事など。知事は「検討していきたい」と答えました。また、知事からの「県内の被爆者は何人いますか？」の質問に「県内被爆者は約550人」の話に、知事は「そんなに

知られるんですか、知らなかったとびつくりされていました。懇談・要請には、被爆2世の中村正樹氏、梅林光生氏、奈良氏の松本俊一議長、労連の松本俊一議長、竹末一美事務局長、新婦人の田中千賀子会長、日本共産党の今井光子県議が参加しました。

県立大、女子大、  
教育大学へ、  
核兵器廃絶の要請

3月11日、奈良県

立大学、奈良女子大学、奈良教育大学を今井光子県議、梅林光生氏が訪問して①署名推進の賛同人になっていただくこと。②署名コーナーの設置、原爆写真展の開催。

③ 広島市・長崎市・(広財)

広島平和文化センターが行っている「広島・長崎講座」で学生達に被爆の実相を知らせてほしいことなどを要請しました。「焼き場に立つ少年」の写真と署名用紙を渡し、各大学の事務局長さんとの懇談では、学生のみなさんへ被爆の実相を知らせ、核兵器廃絶、平和について学んでほしいことを懇談しました。お忙しいなかでしたがお話ができ、そして、しっかり受け止めていただきました。

### 三宅町の 森田町長を訪問

3月13日、三宅町の森田町長を同町の池田議員と今井県議、梅林光生氏で訪問。2月13日に町議10人の全議員さんに「核兵器廃絶を日

本政府に求める」意見書のための学習会を行った事へのお礼を述べ、三宅町から核兵器廃絶の発信を行っていただきたいとお願いしました。

### 河合町の光徳寺 藤満住職と懇談

核兵器核廃にむけて  
共にかんばりましょう

3月13日、ヒバクシャ国際署名推進奈良県民の会の賛同人となっていた、高徳寺の藤満住職を訪ねて懇談をしました。

これには新社会党の森川満委員長も同席しました。県民の会のニュースno1や署名用紙、焼き場に立つ少年の写真などを渡し、核兵器廃絶に取り組みましようという意気投合しました。

今後の予定としては、3月23日に大和郡山市長、3月25日には、安堵町、三郷町、斑鳩町、平群町、生駒市などを訪問の予定です。

署名推進県民の会では、左の写真（102×152mm K S版）を作成しました。写真を立てる木のキューブは、川上村の塩谷議員が作ってくれました。かわかみの杉の木で作ったものでいい香りがします。ご自宅の玄関、お店のカウンターや喫茶店のテーブルなどに署名用紙と一緒に置き、署名普及に活用してみたいかがでしょうか。

### 焼き場に立つ少年

（撮影 米従軍カメラマン 故ジョー・オダネル氏）

オダネル氏は、原爆投下後の広島・長崎を撮影、そのフィルムは封印していました。しかし1989年に「核戦争を繰り返さないことにつながるなら」と反核の決意を込め封印を解きました。その中の一つに、亡くなった弟を背負い火葬の順番を待つ被爆地長崎の写真「焼き場に立つ少年」がありました。オダネル氏は、米国各地で写真展を開催していましたが2007年8月9日、85歳で亡くなりました。奇しくも8月9日は、長崎に原爆が投下された日と同じです。

私たちは、核廃絶と平和で公正な世界の実現を願い、ヒバクシャ国際署名を訴えています。是非、ご協力をお願いします。

### ヒバクシャ国際署名推進奈良県民の会



Photo by Joe O'Donnell, 1945



台座は川上村の塩谷議員が作成したもので3cm×3cm×3cmの正方形の杉の木に切り込みを入れ、そこに写真が立てられるようになっています。

オダネル氏は、1999年来日し広島・長崎を訪問。その時の朝日新聞の記事を紹介します。

#### ◆◆◆◆◆

「佐世保から長崎に入ったら下を眺めていました。10才くらいの少年が歩いてくるのが目に留まりました。おんぶ紐をたすきにかけて、幼子を背中に背負っています。しかし、この少年の様子は、はっきりと違っています。重大な目的を持ってこの焼き場にやって来たという強い意志が感じられました。しかも彼は裸足です。少年は焼き場の淵まで来ると、硬い表情で目を凝

らして立ち尽くしています。少年は焼き場の淵に5分か10分も立っていたでしょうか。白いマスクをした男達がおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶ紐を解き始めました。

この時私は、背中の幼子が既に死んでいる事に初めて気づいたのです。

男達は幼子の手と足を持つとゆっくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。まず幼い肉体が火に溶けるジュウという音がしました。それから眩いほどの炎がさつと舞い上がりました。真っ赤な夕日のような炎は、直立不動の少年のまだあどけない頬を赤く照らし

ました。その時です、炎を食い入るように見つめる少年の唇に血が滲んでいるのに気がついたのは。少年があまりにきつく噛みしめている為、唇の血は流れることなく、ただ少年の下唇に赤くにじんでいました。夕日のような炎が静まると、少年はくるりと踵（きびす）を返し、沈黙のまま焼き場を去っていききました。背筋が凍るような光景でした。「これほど残酷な人災があるだろうか。これは人類に対する重罪と言える」（写真が語る20世紀の目撃者1989年朝日新聞掲載、ジョー・オダネル氏の「コメントから」）